

第 1 章

はじめに

ほとんどの人は、大人になったら子どもをもつことを考えます。あなたがこの本を手にとったということは、あなた自身か、あなたの家族や友人が、赤ちゃんができないという悩みを抱えているのでしょう。不妊に悩んでいる人は少なくありません。20～45歳の英国人が医師を受診する理由の第1位は妊娠ですが、第2位を占めているのは、おそらく不妊です。4組に1組の夫婦が、赤ちゃんが欲しいのになかなかできないという悩みをもち、その大半が、かかりつけの医師に相談しています。また、6組に1組の夫婦が、不妊治療クリニックを受診しています*¹。

この本の目的は、妊娠のしくみや、不妊の原因や、不妊の原因をつきとめるために必要な検査や、各種の不妊治療についての理解を深めてもらうことにあります。

不妊は、単なる医学的・身体的な問題ではありません。赤ちゃんができないという悩みは、夫婦の心に大きな傷を負わせることがあります。これにより夫婦関係が破綻したり、なんの苦勞もなく赤ちゃんができたようにみえる友人や親戚や職場の同僚と仲た

*1 [訳注] 日本でも、10組に1組の夫婦が不妊に悩んでいるとされています。

不 妊

がいしたりすることさえあるのです。不妊に悩む夫婦は、豊穡の世界の中で自分たちだけが仲間はずれにされているように感じ、妊婦や幼児を見かけそうな場所を避けて暮らすようになっていたりすることもあります。不妊治療クリニックは、不妊が引き起こすこうした問題をよくわかっていて、専門的な訓練を受けたカウンセラーを置いています。けれどもなかには、このような専門家の手を借りたがらない夫婦もいるので、この本の最後に『不妊を受け入れる』という章を設けました。

不妊の悩みとそのさまざまな治療法は、多くの夫婦を道徳的な疑問と倫理的なジレンマに直面させます。新しい生殖補助医療技術、非配偶者間生殖補助医療、代理母出産などはとくに重要な問題ですが、このような小さな本では十分に扱うことができないので、最小限の記述にとどめました。

医師や看護師や科学者は、しばしば専門用語を使います。なかにはみなさんが聞きなれない言葉もあるかと思うので、巻末に用語集をつけました。不妊検査や治療の際によく用いられる略語も載せてあります。

この本は、手軽に読めることを重視して書いてあります。くわしい情報が欲しい方は、『役に立つ情報源』を参照してください。

キーポイント

- 不妊に悩んで医師に相談する人はたくさんいます。
- 英国では 4 組に 1 組の夫婦が、なかなか赤ちゃんができないと悩んでおり、6 組に 1 組の夫婦が、不妊治療クリニックを受診しています。
- 日本では、10 組に 1 組の夫婦が不妊に悩んでいるとされています。
- 不妊は、単なる医学的・身体的な問題ではありません。赤ちゃんができないという悩みは、夫婦の心に大きな傷を負わせることがあります。

第2章

不妊とは？

自然に妊娠する可能性がない絶対的不妊は、非常にまれです。絶対的不妊は、男性が精子を作れない場合、女性が早発閉経して卵巣に卵子が残っていない場合、女性の卵管が両方とも閉じていて精子と卵子が出会えない場合などにしか起こりません。こうした問題の多くは、不妊治療により克服することができます。

不妊の大半は、自然に妊娠する可能性が低く、なかなか赤ちゃんができない相対的不妊です。ここでいう「なかなか」とは、具体的にはどのくらいの期間をさすのでしょうか？ それには、いくつかの要因がからんできます。とくに重要なのは、女性の年齢と、不妊をうたがう理由がほかにあるかどうかです。

多くの人は十代のときに、善意の両親や教師から、「正しい方法で避妊しないと、すぐに妊娠してしまいますよ」と言われています。けれどもヒトは、ほかの動物にくらべて妊娠しにくいのです。生殖能力に問題のない若い夫婦でも、1周期あたりの妊娠率はせいぜい33%（3分の1）です。これは、2つのサイコロを投げたときに6の目が1つでも出る確率と同じくらいです。

ほとんどの夫婦の妊娠率はこれより低く、1周期あたりの妊娠

不妊とは？

率の平均は5分の1～6分の1です。これは、1つのサイコロを投げたときに6の目が出る確率と同じくらいです。

生殖能力のある夫婦が避妊をやめると、その50%が3カ月以内に妊娠し、75%が半年以内に妊娠し、90%が1年以内に妊娠します。2年後にはわずかに増えて95%が妊娠します。

一般に、避妊をやめてから1年以内に妊娠しなかったら、医師に相談した方がよいでしょう。2年たっているなら、絶対に医師に相談すべきです。女性の年齢によっては、もっと早く受診した方がよいでしょう。女性は、20歳代の終わりから妊娠しにくくなってきます。最初の変化はゆっくりですが、35歳をすぎた頃から加速してきて、40歳をすぎるとがくんと落ち込みます。おもな原因は、卵巣に残っている卵子の質が低下してくることにあります。

高齢の女性は、妊娠しにくいだけでなく、妊娠しても流産してしまう可能性が高くなります。子宮内膜に問題があることは少なく、卵子の質に問題がある場合や、胎児に障害がある場合が多いようです。さらに、35歳以上の女性の赤ちゃんは、ダウン症候群などの染色体異常をもっている可能性が高くなります。ですか



生殖能力に問題のない若い夫婦の1周期あたりの妊娠率は、約33%（3分の1）です。これは、2つのサイコロを投げたときに6の目が1つでも出る確率と同じくらいです。

不 妊

ら、女性の年齢が 35 歳を超えている場合は、避妊をやめてから 1 年以内に妊娠しなかったら、すぐに専門家の助言を求めるべきです。女性の年齢が 40 歳を超えているなら、半年以内です。

これより早く受診すべき場合もあります。男性については、睾丸の感染症（睾丸炎）や手術（子どもの頃の停留睾丸を陰嚢内に下降させる手術など）

の経験がある場合、女性については、月経不順、希発月経、骨盤内感染症、重い虫垂炎、腹部の手術（卵巣嚢胞の除去など）の経験がある場合です。くわしくは第 4 章『不妊の原因』を参照してください。



ほとんどの夫婦の 1 周期あたりの妊娠率は、5 分の 1～6 分の 1 です。これは、1 つのサイコロを投げたときに 6 の目が出る確率と同じくらいです。

医師に相談する

ときどき、赤ちゃんができないことに悩んでいながら、自分たちが問題を抱えている可能性があることを受け入れられなかったり、医師からプライベートな質問をされることを心配したりして、医師に相談するのを躊躇している夫婦がいます。けれども、そんなに心配する必要はありません。不妊治療クリニックの医師もスタッフも、こうした気持ちに配慮した対応をしてくれるはずです。彼らのもとにやってくる患者さんの多くは、どんな検査を受け、

不妊とは？

どんな問題が発見され、どんな治療を受けるのだろうかと不安や恐怖を感じているからです。医師はあなたにさまざまな情報を教えてくれます。あなたはそれにもとづいて、これから先に進みたいかどうか、進むとしたらどの方法を選択するかを判断します。医師に相談するのが遅くなれば、その分だけ治療の選択肢が狭くなり、成功の可能性が低くなるおそれがあります。

不妊に悩んで医師に相談したからといって、妊娠の可能性を高めるための治療がすぐにはじまるというわけではありません。病院を予約した日を待っているうちに妊娠がわかったという夫婦や、血液検査をはじめとする一連の検査を受けているうちに妊娠していたという夫婦もいます。検査の結果、すべて正常だったという夫婦も少なくありません。避妊をやめてから日が浅い夫婦であれば、「妊娠の可能性はまだ高いから大丈夫です。あと数カ月試してみて妊娠しなければ、もう一度いらっしやい」と言われるだけかもしれません。卵管が開いているかどうかを調べる検査などにより、一時的に妊娠しやすくなることもあります。

不妊治療では体外受精のような先端医療を受けることになるので、費用がかさむのではないかと心配している人がいるかもしれません。先端医療はマスコミに取り上げられやすいので、このような誤解が生じてしまうのでしょう。けれども、不妊の原因の多くは、薬物療法などの簡単な治療でなおります。

不妊の人は増えているのでしょうか？

不妊の人は増えているのでしょうか？ そんなことはありません。ただし、不妊に悩んで医師を受診する夫婦の数は、この15年間に大幅に増えています。これはおそらく、不妊治療の選択肢の広さや効果の高さが人々によく知られるようになってきたからでしょう。また、身近な人から不妊の悩みを打ち明けられることが増えたとしたら、それは、不妊に対するマスコミの注目が高まり、タブー視されなくなってきたからでしょう。

今日では、多くの夫婦が子どもをもつ時期を遅らせています。これは、女性がキャリアを追求したり、夫婦が経済的な安定を確保しようとしたり、夢を実現してから子どもをもとうとするようになったせいかもしれません。英国での統計によると、25年前には、女性が第1子を出産する年齢の平均は20歳代の前半でした。この年齢は、10年前には25歳になり、今日では27歳（結婚している女性にかぎれば30歳）になりました*¹。女性が妊娠しにくくなる年齢まで出産を遅らせるようになったことが、赤ちゃんができにくい夫婦を増やし、医師への相談を増加させているのです。米国での研究によれば、不妊治療クリニックを受診する夫婦の過半数で、女性の年齢が35歳を超えているのだそうで

*1 日本の平成17年度版『国民生活白書』によると、第1子を出生したときの母親の平均年齢は、1980年には26.4歳であったのが2004年には28.9歳まで上がっています。母親の年齢層別の第1子出生数を見ると、20代の出生数の低下傾向が続いている一方で、30～34歳の出生数は緩やかに増加を続けており、35～39歳での出生数も1970年には1.8%であったのが2004年には8.7%まで上昇しています。

不妊とは？

す。この年齢になるとかなり妊娠しにくくなっているため、多くの夫婦が、より効果の高い（その分、ストレスも大きく、費用もかさむ）先端医療を必要とするようになります。

男性の生殖能力の低下をめぐる議論も重要です。いくつかの研究報告がありますが、昔にくらべて男性の精子の数が減ってきているとするものもあれば、変化はないとするものや、自分たちの研究室では増えているというものさえあります。どうやら、検査方法が厳密になるほど、報告される精子の数が少なくなってくるようです。

もちろん、検査方法とは無関係に、精子の数が本当に減ってきているのかもしれませんが。その原因は、環境に存在する有害物質や、食料生産におけるステロイドホルモンの多用にあるのかもしれませんが。最近の研究報告には、職場環境が生殖能力に大きな影響をおよぼしている可能性を示唆するものもいくつかあります。なかには極端な例もあるかもしれませんが、職場環境が生殖能力に重大な影響をおよぼし、これを低下させる原因の1つになっている可能性は十分に考えられます。

キーポイント

- 不妊の悩みはめずらしいものではありません。
- 不妊の多くは、絶対的不妊ではなく、相対的不妊です。
- 生殖能力に問題のない夫婦の90%は、避妊をやめてから1年以内に妊娠します。
- 避妊をやめてから1～2年たっても妊娠しない場合には、医師に相談すべきです。
- 妊娠できるかどうかを予想する上で最も重要な因子は、女性の年齢です。
- 35歳以上の女性が避妊をやめてから1年以内に妊娠しない場合には、医師に相談すべきです。
- 女性に希発月経などの月経異常がある場合や、男性が睾丸の手術や感染症を経験している場合は、早いうちに医師に相談すべきです。